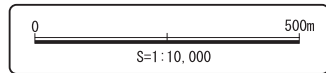


# ①【調査した遺跡】

平成 13 年度～平成 15 年度の 3 カ年にかけて実施した<sup>めでしまとうぶ</sup>愛島東部地区の調査では、<sup>いずみいせき</sup>泉遺跡・<sup>まえのだひがしいせき</sup>前野田東遺跡・<sup>きただいいせき</sup>北台遺跡の 3 つの遺跡の調査を実施しました。これらの遺跡は、それぞれ縄文時代から平安時代の遺跡として遺跡台帳に登録されています。JR 名取駅から南西側へ約 2.6～2.7 km、JR 館腰駅から北西側へ同じく約 2.6～2.7 km 付近に位置しており、現在は、<sup>あい もり めでしまのさと</sup>愛の杜・愛島郷 地区の住宅地や、宮城県警察学校やホームセンターなどがあります。



愛島東部第二地区の位置

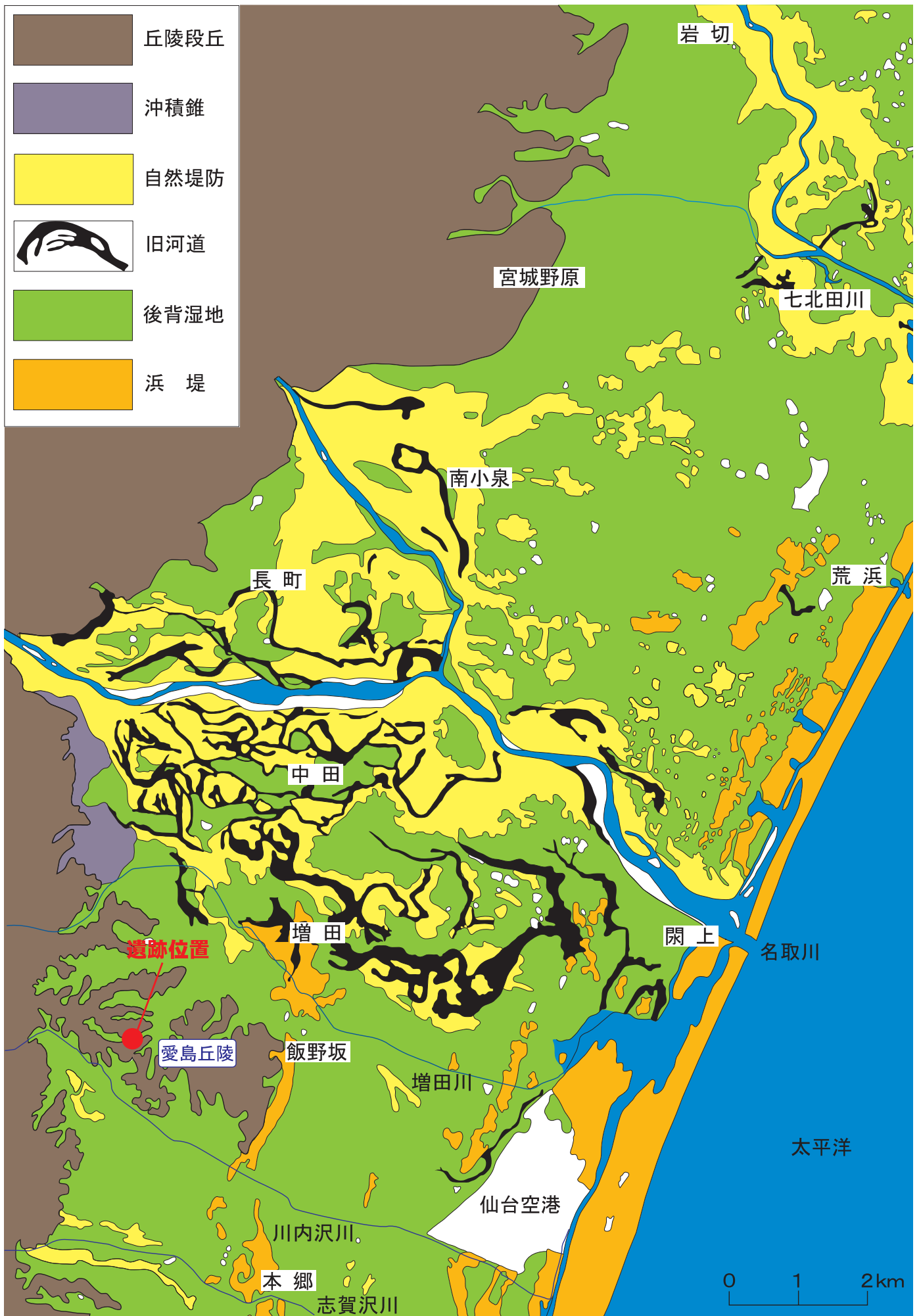


## ②【遺跡の立地】

今回調査を行なった遺跡は、市内西部に連なる標高 200m 前後の高館<sup>たかだて</sup>丘陵<sup>つら</sup>から東側へ大きく張り出す愛島丘陵<sup>めでしまきゅうりょう</sup>（標高 35m 前後）と呼ばれる丘陵上にある遺跡です。愛島丘陵は市内でも数多くの遺跡が見ついている場所で、平野部を見下ろすことが出来る東端部には、全長 168m で東北地方最大規模の雷神山古墳<sup>らいじんやまこふん</sup>や、前方後方墳<sup>ぜんぽうこうほうふん</sup>や方墳<sup>ほうふん</sup>がまとまって所在する飯野坂古墳群<sup>いいのざかこふんぐん</sup>といった国の指定を受けている遺跡もあります。

このパネルは、仙台平野の微細な地形を表した微地形図<sup>びさい</sup>です。図を見ると遺跡が所在する愛島丘陵の北側と南側とでは、地形の状況が大きく異なっていることが分かります。これは平野部が出来上がる過程<sup>かてい</sup>が北側

と南側で異なっているためで、このような差はその場所の気候や風土などと密接な関わりがあるからです。



遺跡周辺の微地形分類図

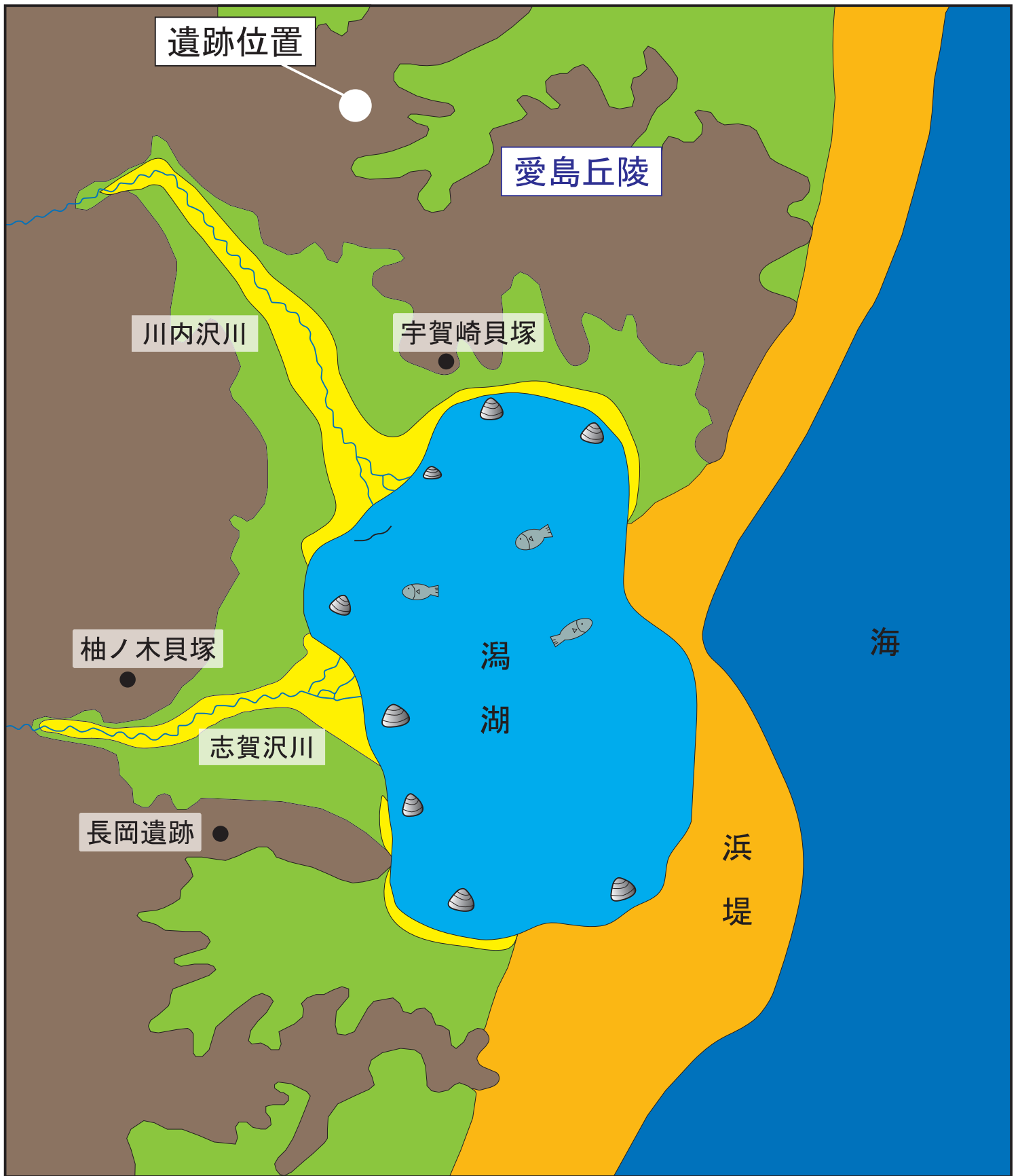
### ③【縄文時代から古墳時代の名取】

旧石器時代は、寒冷な氷河期とやや温暖な間氷期が交互に繰り返す気候で、名取市内で最初に人の生活の痕跡が確認される後期旧石器時代(今から約2万5千年前頃)は最後の氷河期にあたり、海岸線は現在よりもずっと沖合に位置していました。ところが、今から約1万年前頃をさかいに地球は温暖化し、氷河が溶けて海水の量が増えたことで、海岸線の位置は現在の位置よりもずっと内陸へと入り込みました。縄文時代の初め頃(今から6~8千年前頃)には、最も海岸線が入り込み、市内西部の丘陵付近にまで広がりました。

その後、徐々に海岸線は後退して、縄文時代中頃(今から4~5千年前頃)には<sup>めでしまきゅうりょう</sup>愛島丘陵の先端付近に、弥生時代から古墳時代のはじめ頃(約2千年前頃)には、ほぼ現在と同じ位置にまで後退したと考えられています。海岸線が後退した場所には<sup>しょうたくち</sup>沼沢地や湿地が形成されたと考えられますが、愛島丘陵の北側区域では比較的早く平野部が形成され、南部では沼沢地が発達しました。これは、北側区域には、下流へと運搬する土砂の量が多いという特徴を持つ名取川が流れていることと深い関係があると考えられています。市内の時代毎の遺跡の分布などを見てみると、昔の人々が環境の変化に合わせて、丘陵部からより安定した生活を求め徐々に平野部へと生活の場を移していった様子が伺われます。

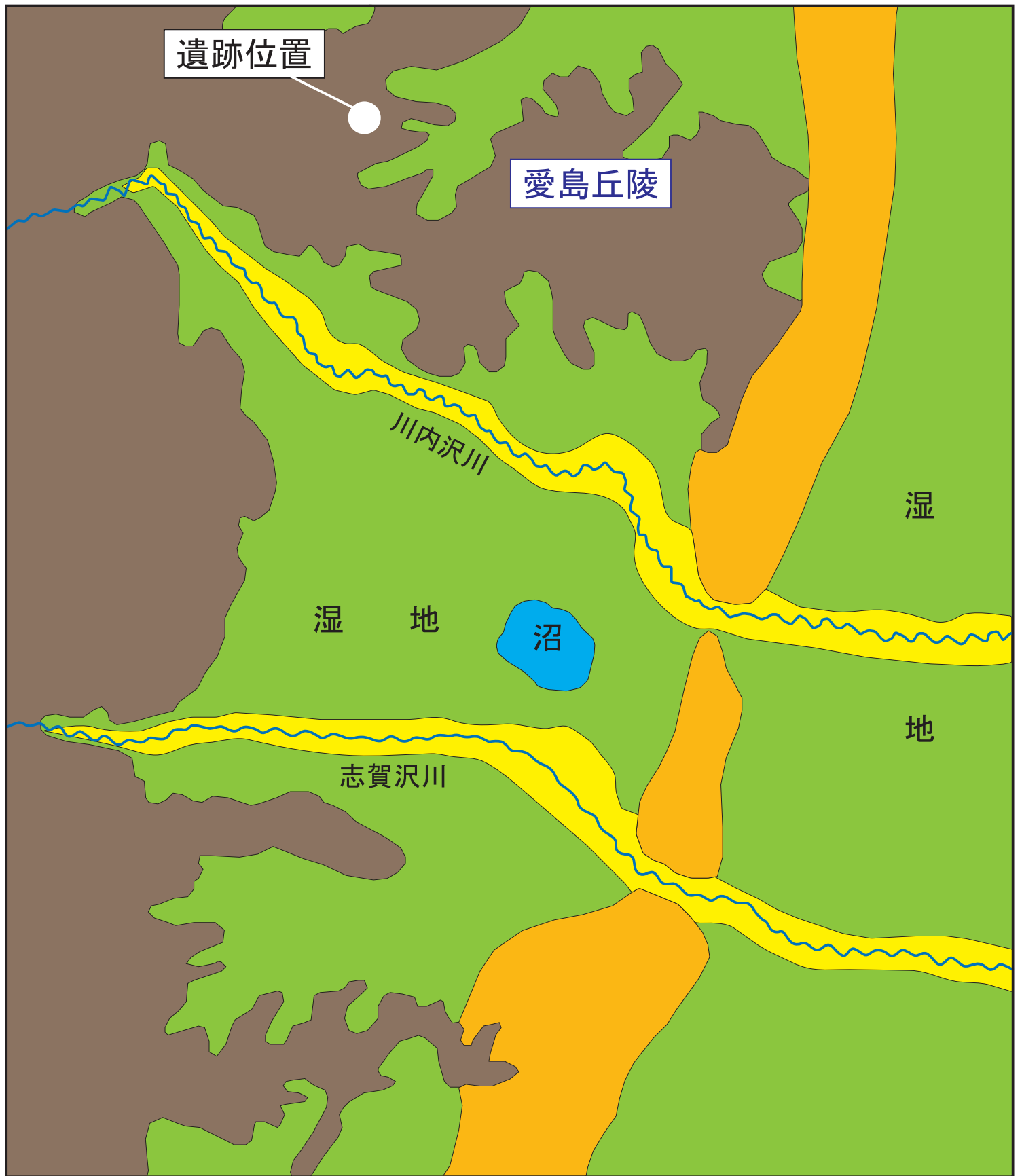


(1) 今から6~8,000年前ごろ



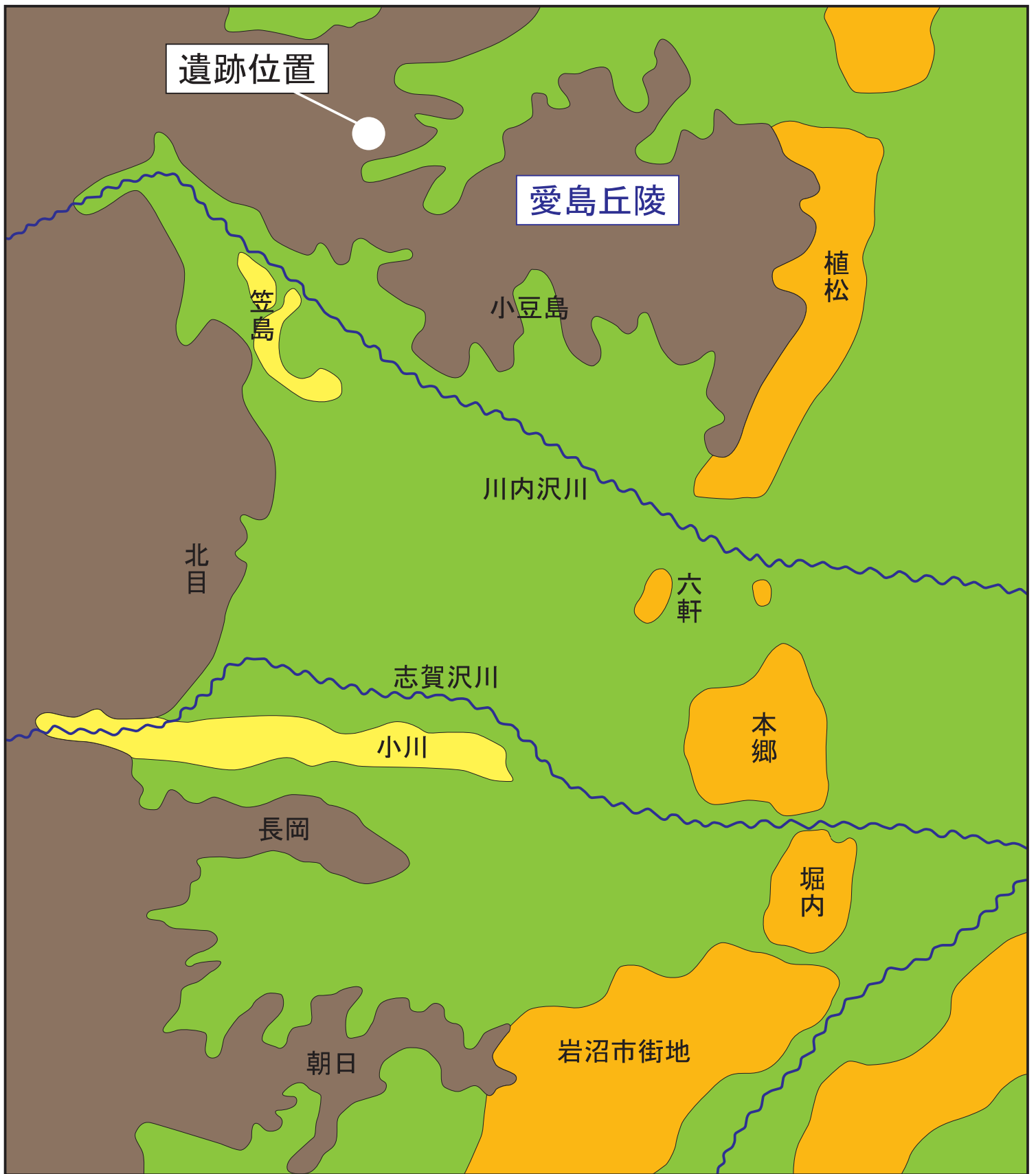
- |  |      |   |      |   |    |   |      |
|--|------|---|------|---|----|---|------|
|  | 丘陵段丘 |  | 自然堤防 |  | 浜堤 |  | 後背湿地 |
|--|------|---|------|---|----|---|------|

(2) 今から4~5,000年前ごろ



(3) 今から2~3,000年前ごろ





(4) 現在

## ④【調査した場所とこれまでの調査】

今回調査した全体の面積は約 63,000 m<sup>2</sup>と広範囲におよぶものとなりました。実際の調査にあたっては、泉遺跡をⅠ区～Ⅴ区に、前野田東遺跡をⅠ区～Ⅵ区に区切って調査を行ないました。

●平成13年度：泉遺跡のⅠ区～Ⅳ区

●平成14年度：泉遺跡のⅤ区

前野田東遺跡のⅠ区西半分とⅡ区～Ⅳ区

北台遺跡

●平成15年度：前野田東遺跡のⅠ区東半分とⅤ区～Ⅵ区



## 遺跡と調査区の区分

ごうぞくきよたくあと

## ⑤【古代の豪族居宅跡 前野田東遺跡】

前野田東遺跡では、奈良時代・平安時代（今から約 1,300～1,200 年前頃）のたてあなしき 竪穴式住居跡 35 軒、ほったてばしらたてもものあと 掘立柱建物跡 19 棟などが見つっています。また、これらを四角形状に囲う区画溝や、鍛冶作業に関連する遺構や炭を焼いた窯跡 1 基、土壙墓や、土器埋設遺構 3 基などのさいし 祭祀やそうそう 葬送に関する遺構や遺物も見つかりました。また、向かいの丘陵部に所在する泉遺跡でも、同じ頃のものと考えられる竪穴遺構 5 ヶ所、や掘立柱建物跡 2 棟の他、炭窯跡や区画溝、道路跡なども見つかっており、当時の遺跡周辺では、多くの人々が生活していた事が判りました。見つかった遺構の種類や、竪穴住居跡の多くが丘陵南斜面部に分布することなど、両遺跡には類似した点が多いことから、互いに関連する一連の遺構群であると思われます。



平安時代の竪穴住居群と建物跡など

前野田館跡

前野田東遺跡

北台遺跡

鍛冶遺構

木炭窯跡

鍛冶工房跡



宮城県警察学校

B地点包含層

A地点包含層

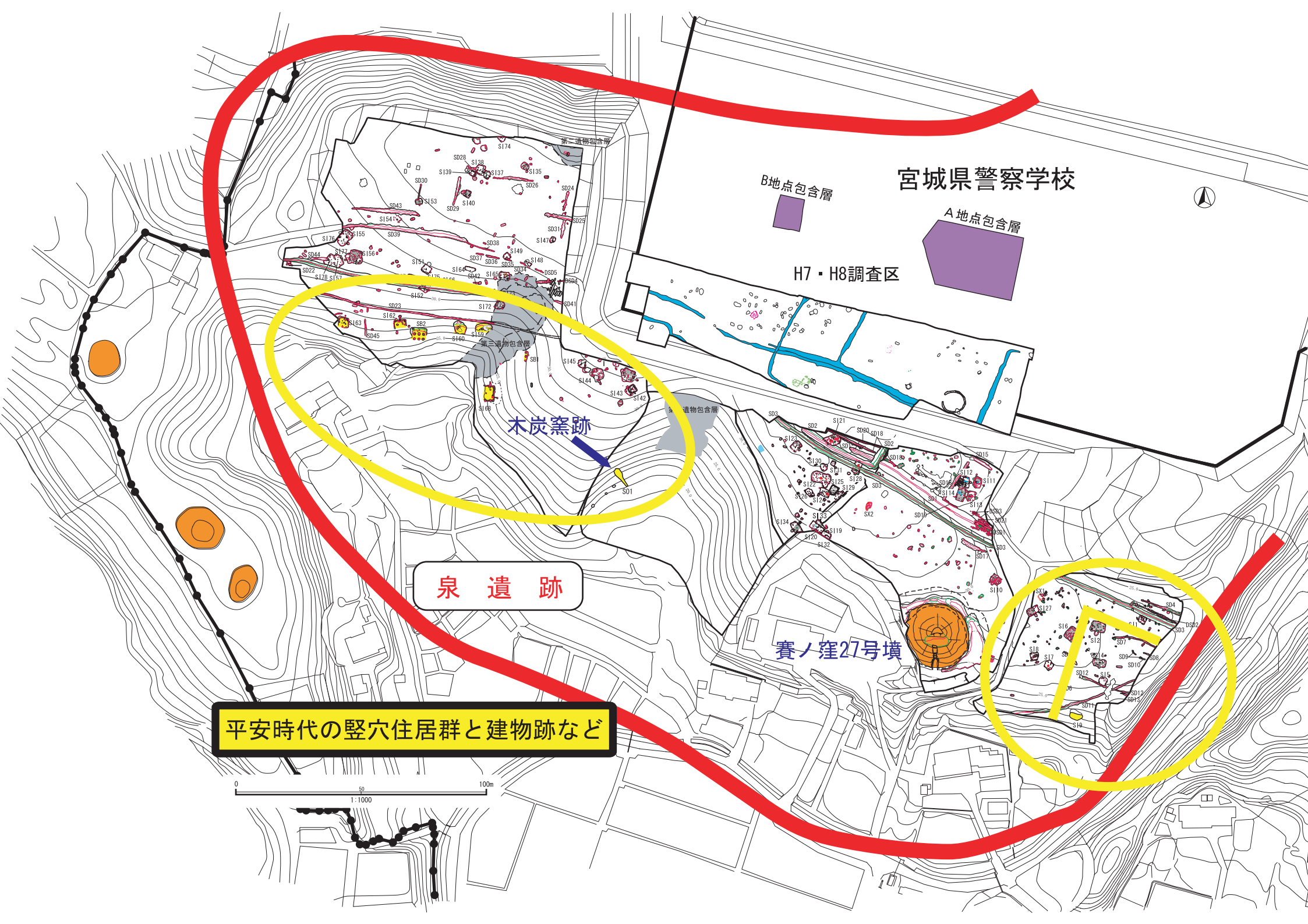
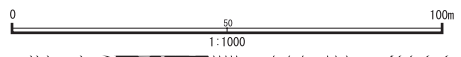
H7・H8調査区

木炭窯跡

泉遺跡

賽ノ窪27号墳

平安時代の竪穴住居群と建物跡など



## 区画施設と区画内外の遺構

### ●区画施設の位置や規模

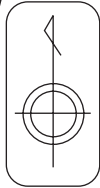
前野田東遺跡では、丘陵上部の平坦面や南側の緩斜面から、平安時代を中心とする竪穴住居や掘立柱建物跡が多数発見されており、これらの遺構の一部を四角く囲ったと思われる区画溝跡が見つかりました。区画溝跡は、南東コーナー付近で3列、西側で4列、北側で2列見つかっていますが、北東コーナー付近から東側の大半の部分と南西側は、後世に削られて無くなってしまったためか、詳細を確認する事は出来ませんでした。ただし、南側中央部については、造られた当初から開いた状態であったものと考えられます。

個々の区画溝は、上幅がおおよそ30 cm～80 cm、深さが30 cm未満の

規模で、底面から材木列や板塀などの痕跡も確認されておらず、非常に簡易なものと考えられます。

区画溝は新旧あわせて大きく3時期のものがあることも判りました。最も古い時期のものと思われる区画A（緑色）で区画される範囲は、南北約66m・東西約63m、面積4,158 m<sup>2</sup>で、東側へ5度前後傾いています。次に古いと思われる区画B（赤色）が囲む範囲は、南北約65m・東西67m以上、面積4,355 m<sup>2</sup>で、東側へ7～8度傾いています。最も新しい時期のものと思われる区画C（青色）は、南北約61m・東西約66m、面積4,026 m<sup>2</sup>の範囲を区画しており、東側へ7～8度傾くものです。

前野田東遺跡の丘陵には、このような区画溝と掘立柱建物跡・竪穴住居跡を中心に構成された「区画施設」が営まれていました。



SD-1

DSK-1

SD-17

SD-18

SD-2

SD-5

SB-15

SB-10

SB-16

SB-14

SB-5

SB-11

SI-22

SD-3

SB-6

SB-1

SB-12

SB-13

SD-4

SB-4

SB-3

SB-2

SB-7

SI-20

SI-23

SI-26

SI-1

SI-2

SD-11

SD-12

SD-7

SD-10

SD-8

SI-4

SX-1

SD-13

SD-14

SD-9

SB-19

SI-3

SI-5

SI-6

SB-17

SB-20

SI-8

SD-15

SI-35

SI-29

SI-7

SD-16

SB-8

SX-3

SI-32

SI-27

SI-28

SI-9

SX-2

SI-38

SI-37

SI-33

SI-27

SI-28

SI-38

SI-34

SI-34

SI-55

0

1:1200

20m





## ●区画内外の施設と出土遺物

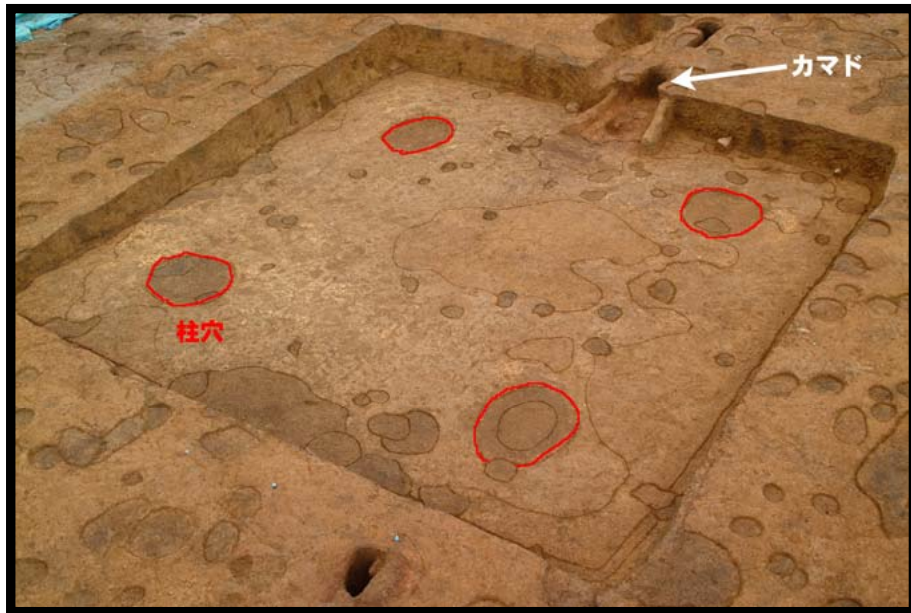
前野田東遺跡の区画施設の内外からは、竪穴住居跡 35 軒・掘立柱建物跡 19 棟・土器を埋設した遺構 3 基、鍛冶かじを行った遺構 2 箇所・木炭を焼いたと思われる窯跡 1 基などが見つかっております。以下では個々の遺構の特徴などについてご紹介します。



たてあなじゅうきょあと たてあないこう  
《**竪穴住居跡と竪穴遺構**》

前野田東遺跡で見つかった竪穴住居跡は、区画施設が見つかった丘陵上の平坦な場所や、南側の緩斜面部で多く見つかっています。丘陵上部で見ついている竪穴住居跡は、区画溝の内部で見つかっており、竪穴住居跡どうしが重なって見つかったものや、掘立柱建物跡と重なって見ついているものがあります。このように遺構どうしが重なっている場合は、重なっている遺構との間に新旧関係（どちらか一方が古い時代のもので、もう一方が時期的に新しく、古い遺構を壊している）があります。

発見された竪穴住居跡の軒数は全部で 35 軒あります。竪穴住居跡は、地面を掘り込んで、その底を床にして生活する家のことで、その内部からは、屋根を支えていた柱の跡や、土器等をはじめとする生活の道具、火を焚いた炉の跡やカマドの跡などが見つかる場合があります。



竪穴式住居の中の様子



重なって見つかった竪穴住居跡

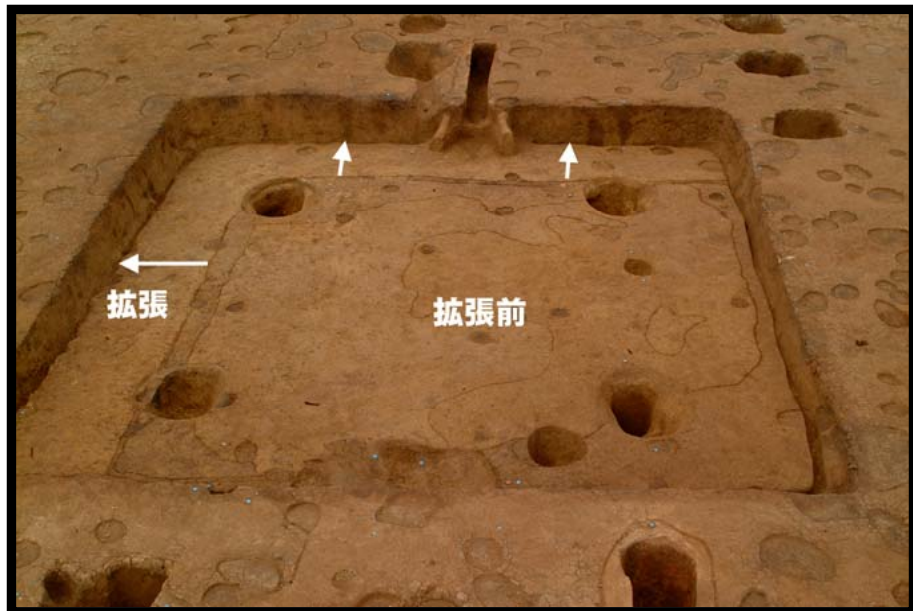


竪穴住居のカマド

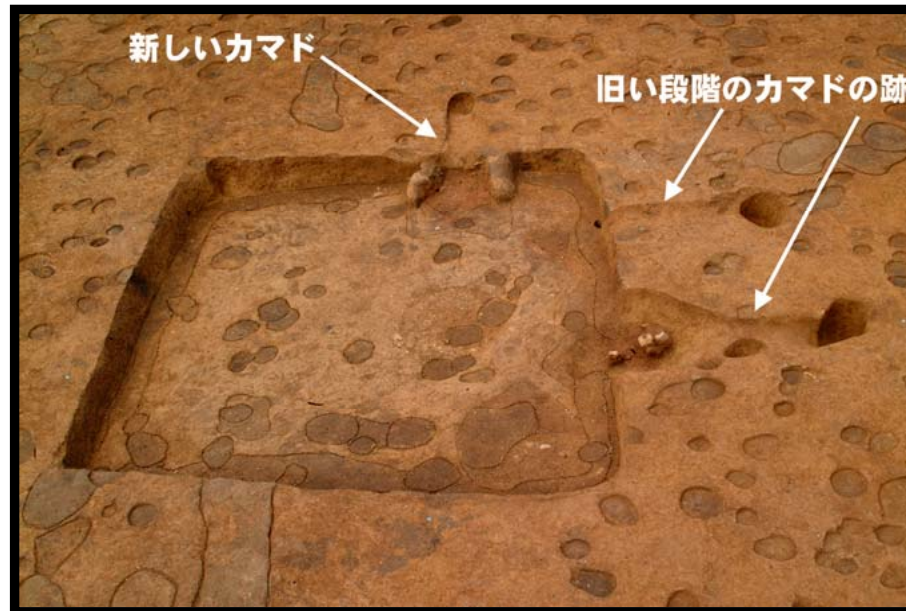


竪穴住居の中から見つかった土器

見つかった<sup>たてあな</sup>竪穴住居跡は、概ね<sup>おおむ</sup>一辺が4～5mの長方形・方形状のものが中心ですが、中には一辺が2.5～3m程の小型のものや、一辺が6～7m程の大型のものもあります。これらの中には同じ位置での建替えや、規模を拡大して建替えられたりしたものもあります。また、1軒の竪穴住居に複数のカマドの痕跡が見つかるものも多くあります。これは、カマド本体が崩れたり、<sup>えんどう</sup>煙道が崩れたりした際などに、位置を変えてカマドの付け替えが行われたためだと考えられます。煙道先端部の煙出し用の穴の中には、壁が崩れて穴がふさがるとを防止するために埋め込まれた、破損した土器などが見つかる場合があります。カマド本体は、白色の粘土などを使って造られているものも多く、その周囲では炊事などに使用されていたと思われる土器などがまとまって出土する場合があります。



拡張された家



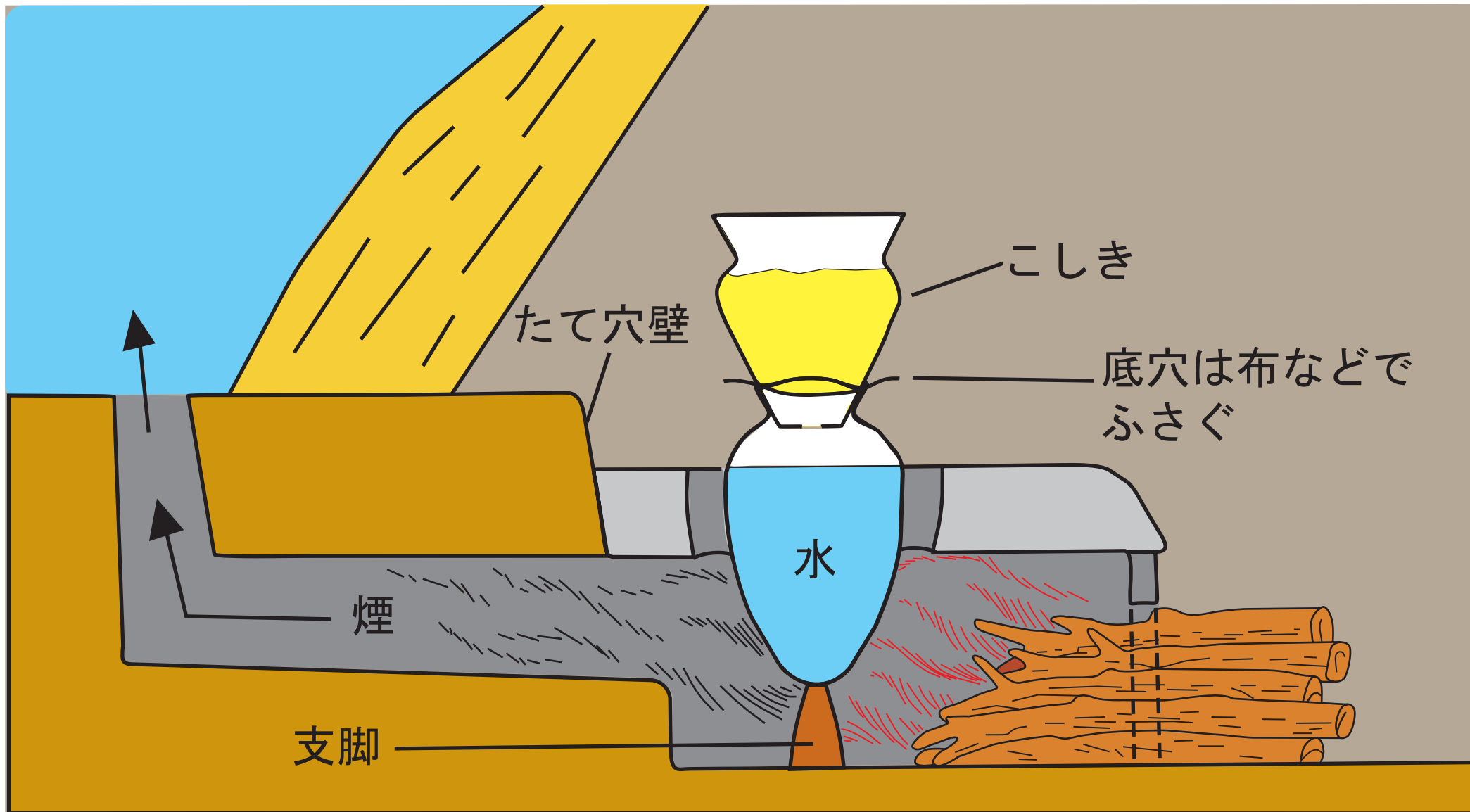
付け替えられたカマド



煙出しの穴に埋め込まれた土器



崩れたカマドと使われていた土器



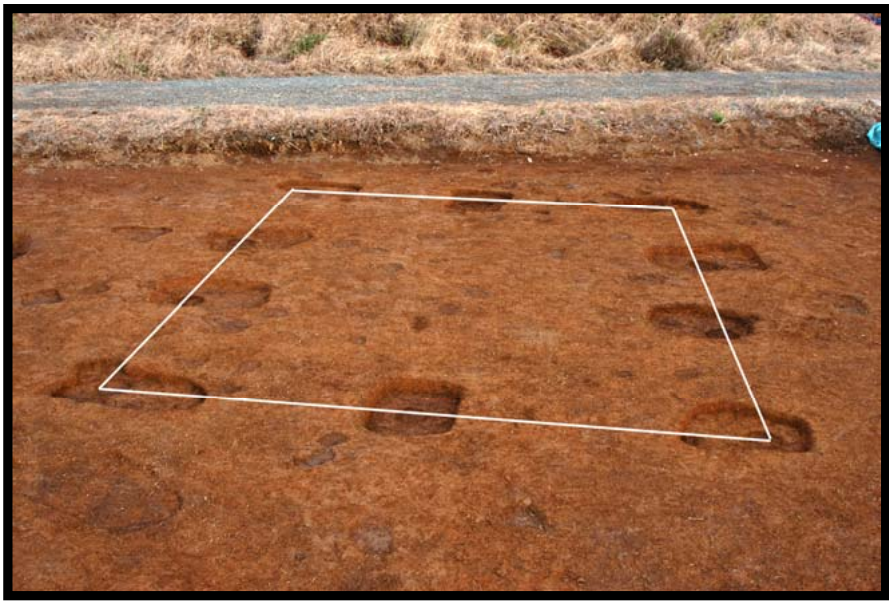
かまど模式図

ほったてばしらたてもものあと  
《掘立柱建物跡》

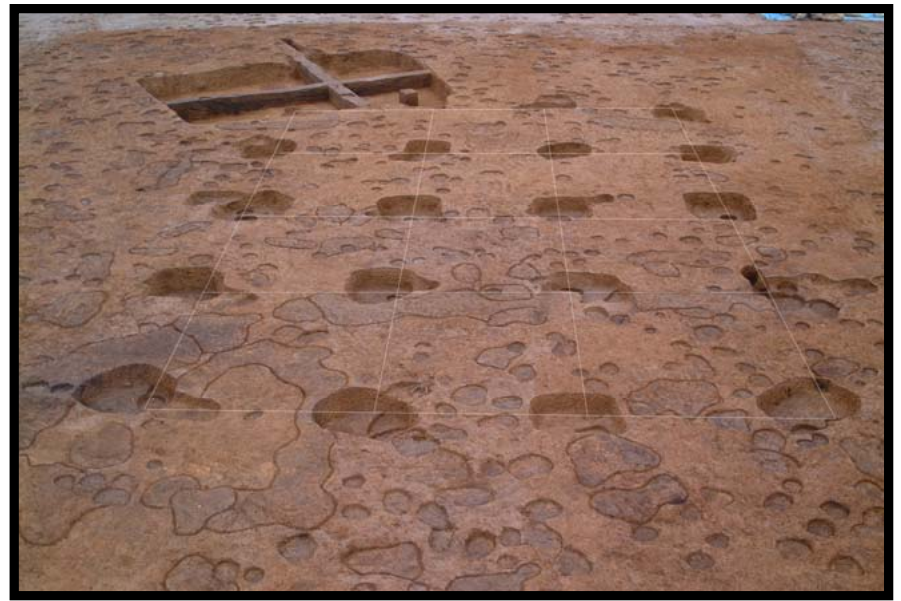
前野田東遺跡の I 区では、古代のものと考えられる掘立柱建物跡が 19 棟見つかり、1 棟を除く 18 棟が、丘陵上部の平坦面部分で見つかり、見つかった建物跡には、建物の外周部に柱を配置した側柱建物跡や、外周部だけでなく内側の柱筋にも柱を配した総柱建物跡などがあります。総柱の建物跡は、重量のあるものも支えられる構造となっていることから、倉庫などとして利用された建物の可能性が考えられます。

規模の小さい建物では、東西 3.5m×南北 3.3m の 2 間（柱穴は 3 個）四方のものがあり、最も大きな建物は、南北 9.4m×東西 6.1m で 4 間（柱穴は 5 個）×3 間（柱穴は 4 個）の総柱建物跡ですが、多くは、一辺が 3m～5m 前後で柱間が 2～3 間の建物跡です。



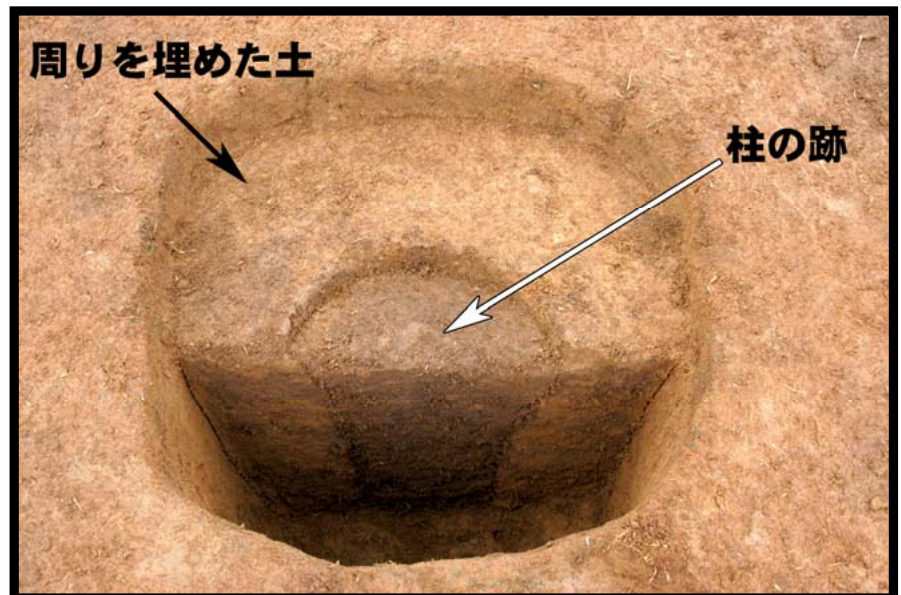


側柱建物跡



総柱建物跡

個々の柱穴は、一辺が 60 cm～1m 前後の隅丸方形や長形状のものが中心です。個々の柱穴に埋まっている土を慎重に掘りすすめると、柱を据えていた位置や使われていた柱の形・太さなどが分かる場合があります。



柱穴を半分掘った様子

建物を建てる際には、掘り込んだ柱穴の中に柱材を据えた後、性質の異なる土を交互に詰め込んで埋め戻します。そうすることで、同じ土だけで埋め戻した時よりも柱を安定させることができます。また、柱穴の中からは、根石ねいしとして入れられたと思われる大きな石や鉄製品などが見つかる場合もあります。こうした個々の柱穴の配置や内容を検討することで、当時の建物の様子や内容の一端を知ることができます。



柱穴の中から見つかった根石



柱穴の中から見つかった鉄製鎌

ど き ま い せ つ い こ う  
《土器埋設遺構》

土器が埋設された遺構が、I区の区画施設の北東隅で1基、V区の丘陵上の平坦面で2基見つかり、前者と後者は造られた時期はおおよそ同じ頃と思われるが、埋設されたものに違いがあります。

I区の区画施設の北東隅で見つかった1号土器埋設遺構は、直径約90 cm・深さ10～20 cmの楕円形のもので、中から埋められた須恵器の坏すえきと壺つぎ、鉄の鍬やじりと鉄刀つぼが見つかりました。須恵器の壺は、逆さまの状態で発見され、口の部分には、坏が蓋をするようにはめ込まれていました。鉄刀は壺の近くで、切先きっさきを南東方向へと向けた状態で、鉄鍬は底面付近からそれぞれ発見されました。

底の部分で直接火を焚いた痕跡はありませんでしたが、埋まっていた土の中には、炭化物が多く含まれていました。この遺構がどんな性格のものなのか明確ではありませんが、区画施設の北東隅付近に位置しており、その造営に関わる祭祀さいしなどが行われた可能性もあります。

V区で見つかった2基の土器埋設遺構は、どちらも長軸90 cm前後の楕円形の浅い土壌で、土師器の甕かみが上下逆さまに埋められていました。1号土器埋設遺構とは埋められたものは異なりますが、土器を上下逆さまに埋める点は類似しており、関連する遺構なのかもしれません。



見つかった様子



逆さまに埋められた須恵器の壺



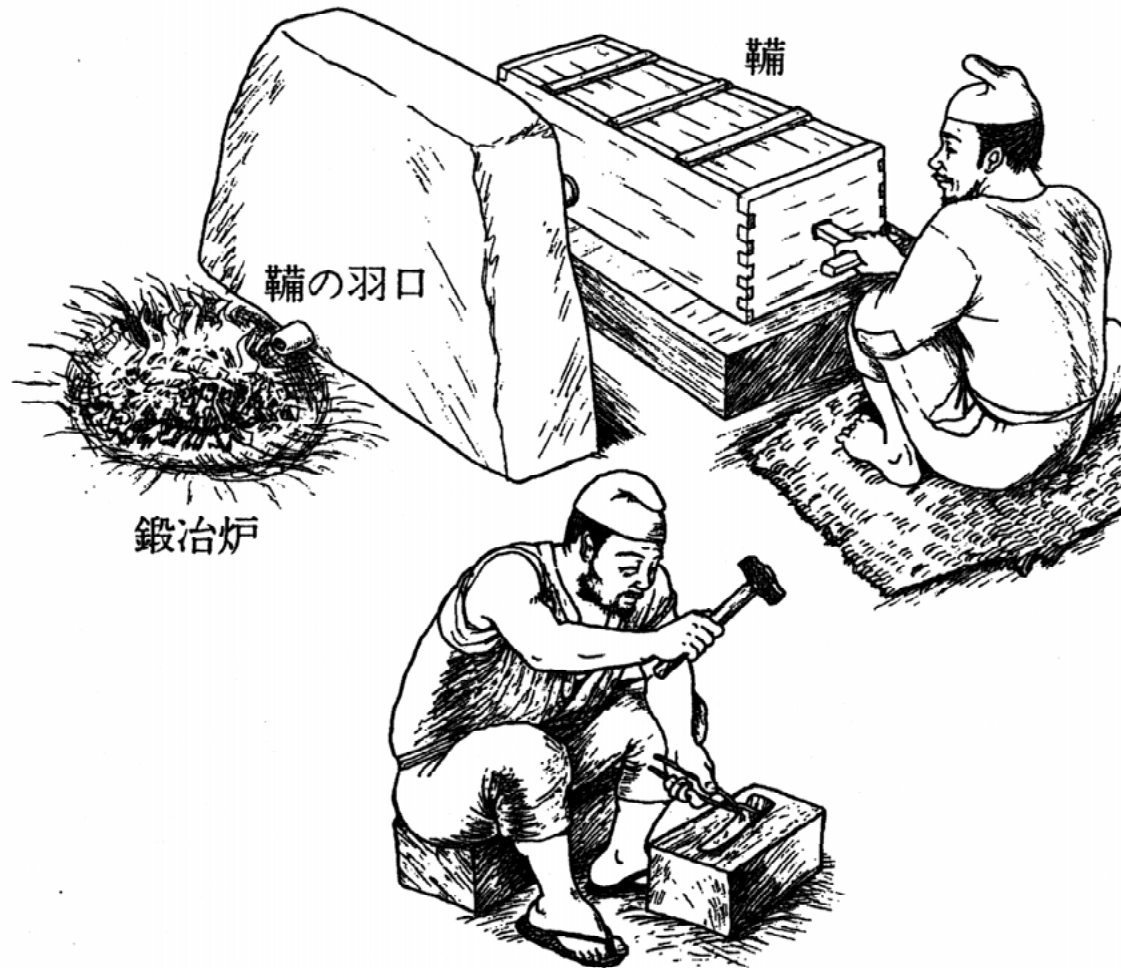
壺の蓋にされた須恵器の坏



埋められていた土器と鉄製品

## かじかんれんいこう 《鍛冶関連遺構》

区画施設の東側にあたるV区では、鍛冶作業に関わる遺構が2ヶ所で見つかっています。鍛冶作業とは、鉄鉱石や砂鉄を原料とする不純物を含んだ鉄素材を加熱・冷却・鍛練たんれんし、不純物を取り除いたり、炭素の量を調整したりして、用途にあった鉄素材を得たり、鉄製品を製作したりする作業のことを言います。鉄製品の製作には、鍛冶炉かじろと送風施設である鞴ふいごが必要となります。炉は地面を掘り窪めて火床を設け、そこに鉄素材と木炭を入れます。着火後に鞴で送風して、火勢を強めて鉄素材を半熔融の状態にします。この過程でも鉄素材に含まれる不純物を取り除かれます。その後、半熔融の鉄素材を炉から取り出して、銑床石かなとこいしの上に乗せ、鎚つちなどで鍛打たんだして目的の鉄器に仕上げます。



鍛冶作業の様子

か じ こうぼうあと

SI50鍛冶工房跡は、長軸約 3.6m・短軸約 3.3m のカマドを持つ方

形状の竪穴遺構内部に造られたもので、床面中央からやや北寄りの位

置で、床を 20 cmほど楕円形に掘りくぼめた炉の跡と、その南東側に

隣接する長軸約 85 cm・深さ 40 cm前後の隅丸形状の土壇が見つかり

ました。この炉・土壇の西および南脇では、鍛冶作業で排出された

と思われる鉄滓（てっさい）が多量に見つかりました。また、炉や土

壇に埋まっていた土の中からも、鍛造剥片（鍛錬の過程で鉄器表面に

生成されるもの）や粒状滓（精錬過程で発生したガスなどに伴い形

成。湯玉とも呼ばれる）、鉄滓、鞆の土製送風管（羽口）が出土し

ていることから、精錬・鍛練鍛冶作業が行われていたと想定されます。

炉脇の土壇は、作業中に出る鉄滓等を入れるための、廃滓土壇と考

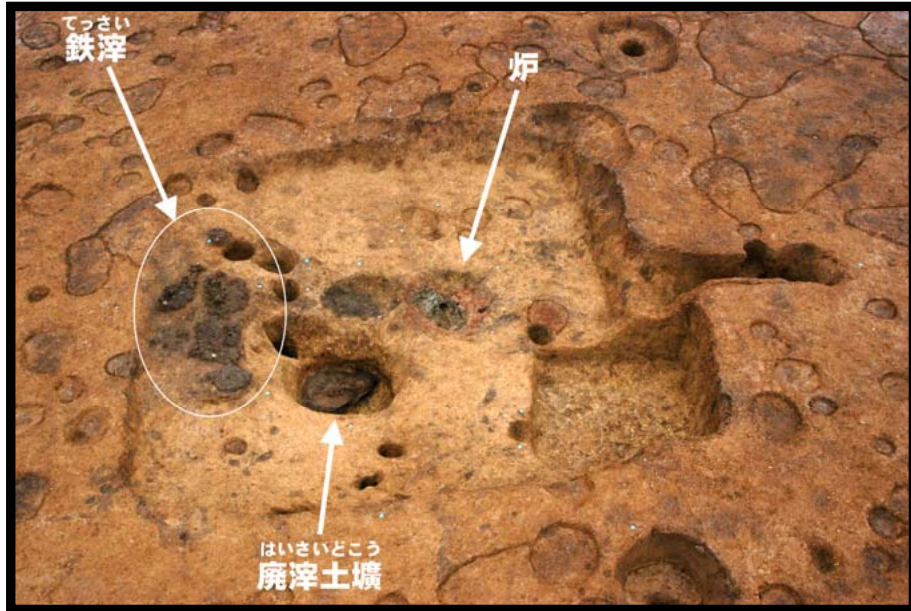
えられます。この工房跡がいつ頃のものなのかについては、出土品か

らは明確に判断できませんが、竪穴遺構の中に埋まっていた土の中に、

10 世紀初頭頃に降下したと考えられている灰白色火山灰を含んでい

ることや、周辺の竪穴遺構などの年代から推測すれば、おおよそ 9

世紀後半頃のものだと思われます。



か じ ころ ぼう  
 豎穴の中に設けられた鍛冶工房



はいさいどころ  
 鍛冶炉（右側）と廃滓土壙（左）



鍛冶炉の断面の様子



はぐち  
 土壙の中に捨てられたフイゴ羽口

また、もう一方の鍛冶遺構は、炉跡と廃滓土壙だけが見つかっており、上屋が架けられた痕跡は見つかりません。露天（屋外）での鍛冶作業はあまり考えにくいため、非常に簡易な上屋があったか、非常に短期間だけ使用するなどの作業形態であったのかもかもしれません。SI50 鍛冶工房内で見つかったものと、炉の形態や出土品などが類似している点や、周辺の遺構との関係などから、この鍛冶遺構の操業年代も、8世紀末～10世紀初頭の間である可能性が高いと思われます。





屋外の鍛冶遺構



捨てられた鍛冶作業で出たくず



鍛冶作業で使われた炉跡

もくたんかまあと  
《木炭窯跡》

区画施設の西側約 30m 離れた沢地地形の上部では、炭を焼いたと考えられる木炭窯跡が 1 基見つかっています。窯跡は木炭が生成される焼成室、焚き口付近の燃焼部、燃焼部手前の前庭部の大きく 3 つの部位で構成されており、焼成室先端から前庭部先端までの全長は約 10m、焼成室の最大幅は約 2.2m で、概ね左右対称の平面形です。焼成室の西側中央付近には、煙を排出するための煙道が見つっていますが、東壁にも古い段階の煙道の可能性がある張り出しが認められており、煙道の付け替えが行われた痕跡かもしれません。焼成室内に溜まっていた土を観察した所、少なくとも 6 回は炭焼き作業を行って

いることが分かりました。出土品が木炭以外に確認されていないため、造られた時期は明確ではありませんが、東側に所在する区画施設などに調理や採暖に必要な燃料を供給したり、鍛冶作業などで大量に必要な燃料を供給したりするために造られた窯跡なのかもしれません。

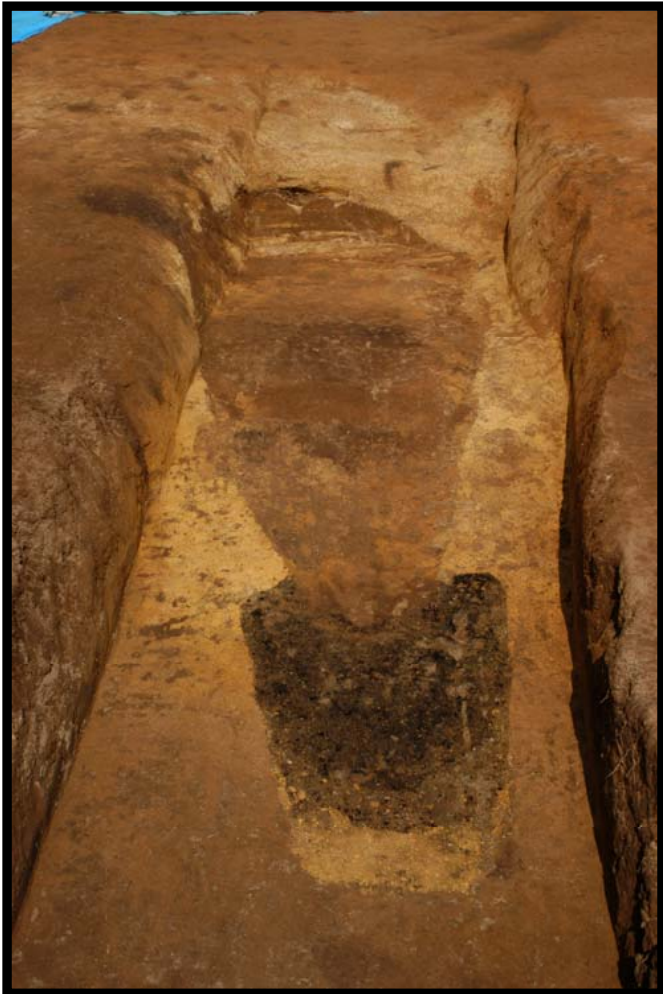
木炭窯跡は、南向いの丘陵に所在する泉遺跡でも1基見つかっており、窯跡と近接した位置には、前野田東遺跡で見つかった区画施設の内外に所在する竪穴遺構や掘立柱建物跡と同じ時期の竪穴遺構や建物跡も見つかっており、これらも一連の遺構の可能性が高いものと思われます。



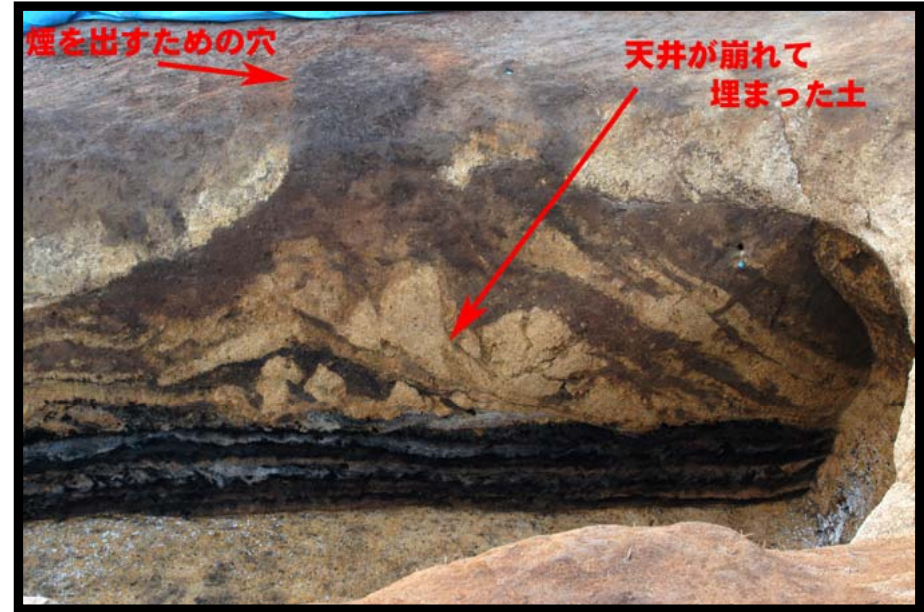
泉遺跡で見つかった木炭窯跡



断面の様子



木炭窯跡が見つかった様子



縦に半分だけ ↑  
掘った様子 (右上)

中に溜まった土を  
全部掘りあげた様子 →

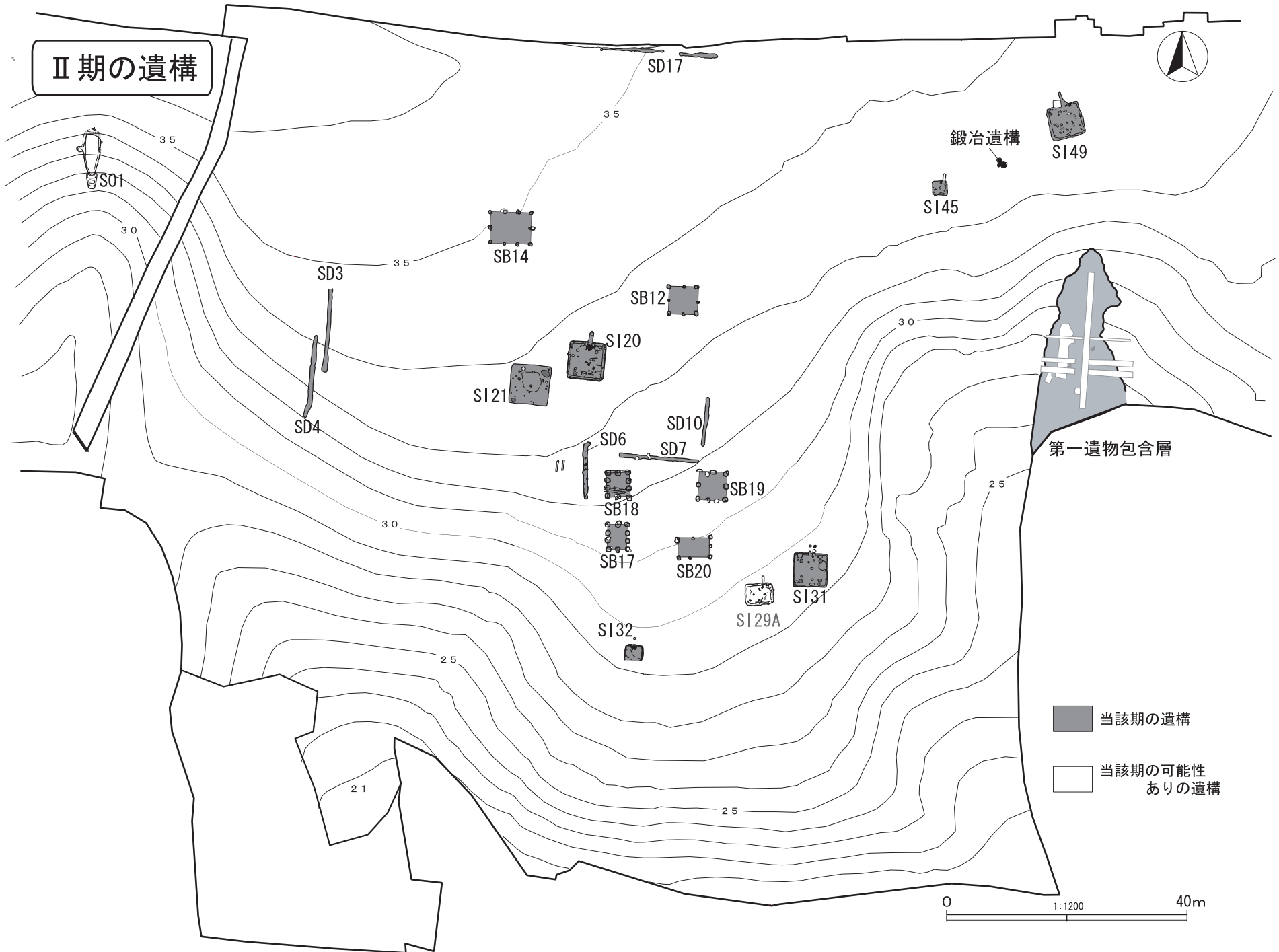


## ● 区画施設の変遷

区画溝の内外で見つかったたてあな 竪穴遺構やほったてばしらたてもものあと 掘立柱建物跡などの遺構の多くは、出土品などから 8 世紀後半～9 世紀にかけての遺構群だと考えられます。しかし、見つかった遺構の全てが同じ時期に同時に存在していたわけではなく、区画溝や各遺構の新旧関係、出土した土器の違いなどから考えて大きく 3 段階のへんせん 変遷があると想定されました。

## ①階：8世紀末～9世紀初め頃

丘陵上部の平坦面を中心に、竪穴遺構と掘立柱建物跡が造られます。この段階では区画溝が区画していた範囲は明確ではありませんが、仮に四角形状に区画溝が巡っていたとした場合には、区画の外側にも掘立柱建物跡が建てられていたこととなります。区画内側と外側との空間の区別が、あまり厳密ではなかったのかもしれませんが、また、区画自体が部分的なものであった可能性もあります。この段階では、まだ丘陵の下部に竪穴遺構が造られていません。

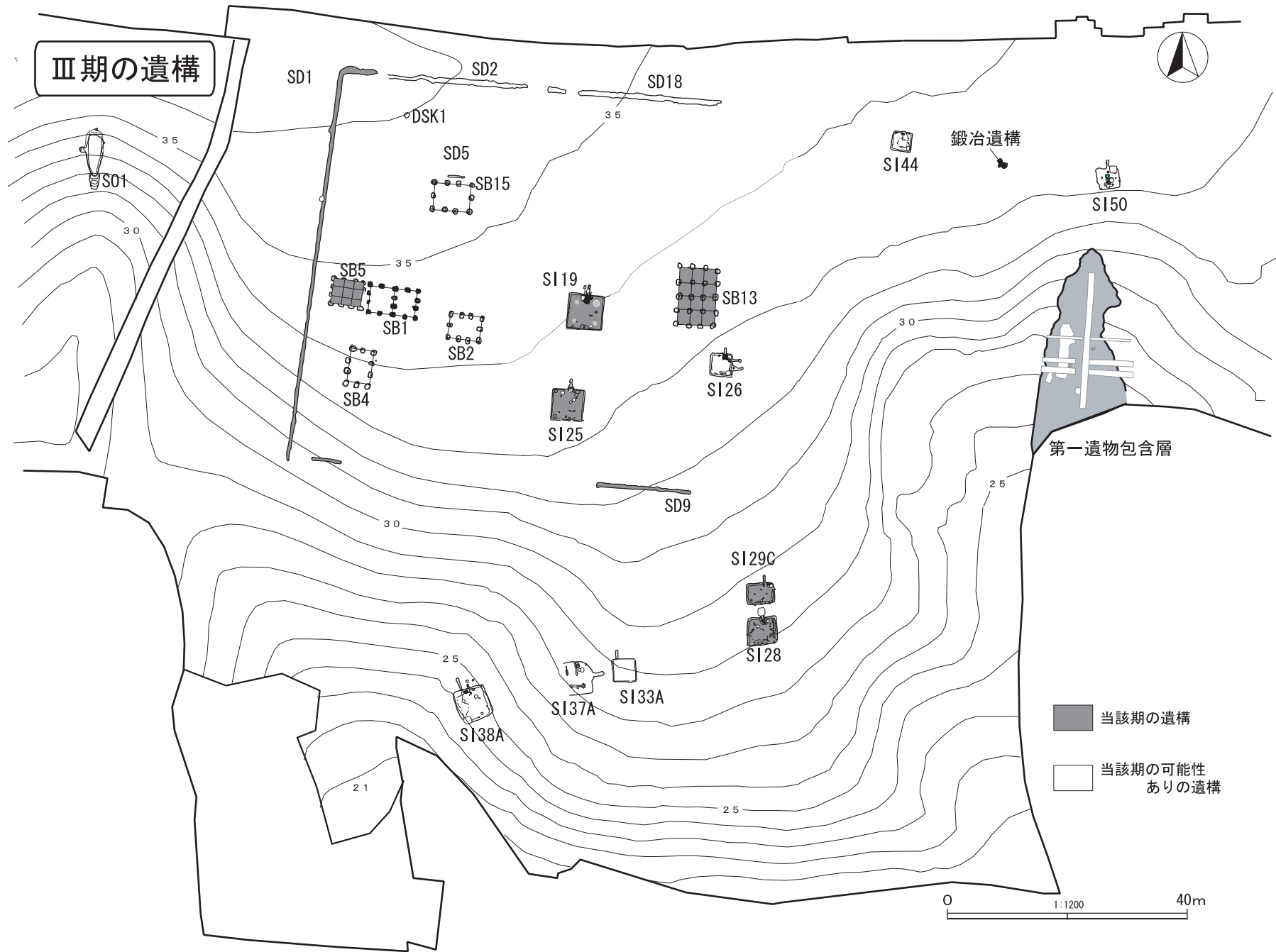


## ②段階：9世紀中頃

①階からやや南西側にずれた位置に、比較的整った長方形状の区画が形成されます。区画の内部には比較的整然と並ぶ掘立柱建物跡と、限られた小数の竪穴遺構が配置されます。この段階になると丘陵下部の斜面に竪穴遺構が少数造られますが、区画の外側には掘立柱建物跡は建てられていません。



# Ⅲ期の遺構



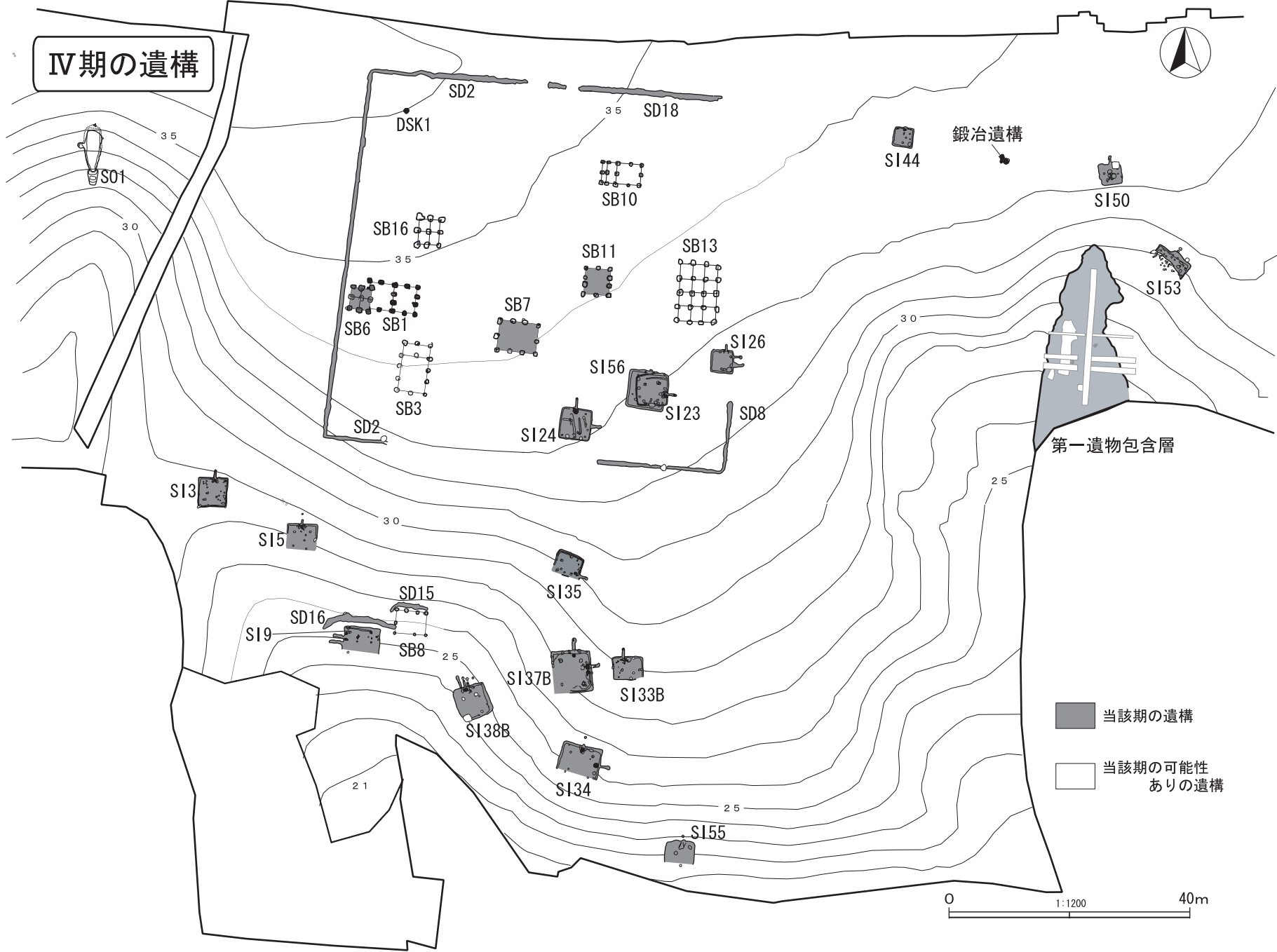
■ 当該期の遺構  
□ 当該期の可能性ありの遺構

0 1:1200 40m

### ③段階：9世紀後半頃～9世紀末頃

②段階の区画範囲から5m程東側へと位置をずらし、南辺を約3m北側に縮めて新たな区画溝が造られます。区画内部には前段階と同じく掘立柱建物跡と竪穴遺構が配置されますが、竪穴遺構の配置が区画南東部に限定されるなど、空間内部の施設配置にも明確な区別が図られたようです。また、丘陵下部の斜面では、前段階から継続的に竪穴遺構が造られて数も増加し、この区画を伴う施設の一帯が最も充実したと思われる段階です。

# IV期の遺構



このように大きく 3 段階の変遷は想定されますが、前段階の施設を全て一気に壊して次段階に全て新設するような劇的な変化があったわけではなく、実際には、ほぼ連続的な変遷であったと思われます。このため、図に示したそれぞれの段階を構成する各遺構についても、全てが図のように同時に存在したものではない可能性や、前段階の遺構が次の段階のある時期まで存続していた可能性などもあるので、大きな流れとして捉えられるものです。

## ●区画の性格

前野田東遺跡で見つかった、区画溝や、その内外に分布する掘立柱建物跡ほったてばしらたてもものあとやたてあな竪穴遺構などの在り方は、区画内で比較的整然と配置されている点などから、ある程度計画的に造営された施設であることが想定されます。こうした特徴を持つ遺構は、当時の役所かんが（官衙）に関わりを持つ施設に見られる特徴であることから、本遺跡の性格も、当時の公的な機関と何らかの関わりを持つものの可能性が考えられます。

当時の代表的な官衙には、近い所ではむつこくふ陸奥国府である多賀城跡（多賀城市）わたりぐんが、亶理郡衙跡と考えられている三十三間堂遺跡（亶理町）などがありますが、これらの官衙の在り方と今回見つかった施設を比べ

てみると、区画溝や区画自体の規模、区画方法、区画内外の施設の配置・規模・構造・種類など、いずれをとっても本遺跡のものの方が小規模かつ簡易なものであることから、こうした官衙遺跡よりも下位の階層に属するものであろうことは容易に想像できます。また、当時の大規模な集落内などでは、官衙遺跡と類似した特徴を持つ遺構が発見されている事例があり、こうしたものは「官衙風の建物群」や「ごうぞく豪族きよたく居宅」などと呼ばれています。その特徴は単なる居住施設だけではなく、物資の集積や収穫物の収納・保管、宗教儀礼、手工業生産などの様々な機能を持つものであったようです。本遺跡で見つかった区画を伴う遺構群も、こうした「豪族居宅」などと同様の性格を持つ施設であったのかもしれませんが。